企業との連携による PBL の試み

―生活環境マネジメント学演習として GSR 学生アイデアコンテストに参加して―

生活環境マネジメント学科
宮崎　正浩

１．はじめに

中央教育審議会の「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）」によると、大学の学士課程教育では、「想定外の事態に遭遇したときに、そこに存在する問題を発見し、それを解決するための道筋を見定める能力」が求められる。そのためには、「従来のような知識の伝達・注入を中心とした授業から、教員と学生が意思疎通を図りつつ、一緒になって切磋琢磨し、相互に刺激を与えながら知的に成長する場を創り、学生が主体的に問題を発見し解を見いだしていく能動的学修（アクティブ・ラーニング）への転換が必要である」としている。このような能動的学修の方法として、PBL（Problem-Based Learning）が急浮上している（安西、2013）。

筆者が担当する生活環境マネジメント学演習（宮崎ゼミ）[1]は、2013 年 9 月 28 日（土）に開催された日本経済研究センター（日経センター）主催の「GSR 学生アイデアコンテスト」に参加した。本稿では、企業との連携による PBL の一例として、宮崎ゼミが参加した GSR 学生アイデアコンテストの事例を紹介する。

２．学生アイデアコンテストの枠組み

この学生コンテストは、日経センターが主催する GSR 研究会[2]の一環として「大学生が企業と共に考える GSR（＝Global Social Responsibility）：地球規模での社会的責任とはー」というテーマで、貧困、環境問題など世界的な課題を企業の力で解決する道はあるか、について学生がアイデアを競うものである（今回で 4 回目）。全国から選ばれた 9 大学のチームが、参加 8 企業の中から選んだ 2 社のリソースを組み合わせて事業プランを提案するものである。その参加の枠組みは下記の通りである。

- 開催日時：2013 年 9 月 28 日（土）
- 会場：電通ホール（東京・汐留）
- 参加大学：跡見学園女子大学、立教大、法政大、独協大、明治学院大、静岡県立大、関西学院大、慶応大学、明治大学
- 参加企業：伊藤忠商事、第一三共、千代田化工建設、富士ゼロックス、ベネッセホールディングス、日立製作所、楽天、ファンケル

- 審査会委員長：茂木友三郎氏（キッコーマン名誉会長・取締役会議長）
- 審査基準：①マッチング性（2 社の経営資源の組み合わせ方の優劣）、②革新性、③実現性（採算性を含む）、④社会的インパクト、⑤プレゼンテーション能力（表現が優れているか）
- プレゼンテーションの枠組み：
  - 企業 2 社の経営資源を組み合わせて、地球規模の課題に取り組み、持続可能な世界の姿を描き出すこと
  - 単なる寄付行為ではなく、本業を通じての課題解決を目指すこと
  - １つのビジネスとして成り立たせるために、必要であれば、政府、NPO の活用も視野に入れること
  - 学生チームが 2 社を各 2 回訪問し、公開情報ではわからない部分を直接質問し、具体的なプランをまとめる
  - 発表時間は 15 分以内

３．参加に至る経緯

2013 年 5 月 8 日に日経センターから筆者に対し本コンテスト参加の打診があった。その翌日（5 月 9 日）のゼミでは、筆者から本件の概要を説明したが、急な話であるため参加するかどうかはその場では決めず、次回のゼミで討議することとした。

翌週 5 月 16 日のゼミでは、4 年生は就職活動があるという事情の違いがあるため、3 年生と 4 年生に分かれて討議を行った。3 年生はこのようなコンテストに参加した経験がなく、しかも発表の様子は USTREAM で放映されることから、消極的な意見が多かった。しかし、4 年生からは本件に参加することは就職活動にも役に立つので参加したほうがよいとの強い意見が出された。全体討議の結果、ゼミとして参加する（ただし発表は 3 年生が中心となって行う）ことを決定した。

5 月 24 日に日経センターにて本コンテストに参加予定の大学と企業による打ち合わせ会が開催された。これには、ゼミ長である清水さん（4 年生）と 3 年生 1 名が出席した。この会では、コンテストの概要説明、参加大学の学生代表のあいさつ及び参加企業から企業概要の説明があった。

最初の課題は、希望する 2 社の組み合わせを（優先順位を付けて）3 つまで提出することであった。このため、5 月 30 日のゼミでは、入手した 8 社のパンフレットとそれを基に整理した企業情報をゼミで共有し、そのうちからどの 2 社を選ぶかについてグループ討議を行った。その結果、8 つの組み合わせが提案された。

6 月 6 日のゼミでは、これら 8 つの組み合わせについて、どのようなビジネスプランが可能かについてグループ討議を行い、3 つの組み合わせに絞り込んだ。さらに 6 月 13 日のゼミでは、3 つの組み合わせをコンテストの審査基準に照らして適切かについてグループ討議を行い、その優先順位を決定した（ゼミ長は 6 月 16 日にこれを日経センターに提出）。そ

の後日経センター内での調整があり、宮崎ゼミは第一三共（医薬品）とベネッセ（教育）の組み合わせとなった。

7 月からは、この 2 社の組み合わせでどのようなビジネスプランが可能かという検討を行った。最初の自由討議からは 9 つのアイデアが出てきた。7 月 4 日のゼミではこれらの案を比較検討し、母子死亡率を低減するための新しいビジネスをインドで展開する、という案でまとまった。その後コンテストに参加するゼミ生が討議して具体的な案を作成した。

8 月 6 日にゼミ生は第一三共を訪問し、自分達の案を説明した。これに対し第一三共の担当者からは、同社がインドでは医療機器を積み込んだバスで貧困地域での無料巡回診療を行うとともに、妊産婦の健康について啓蒙普及活動を実施しているとの説明があり、このアイデアの「革新性」に疑問符がついた。

このため、ゼミ生が夏休み中に大学に集まって検討し、テーマを急遽「中国での食と健康についての教育」に変更することとした。これは、経済発展している中国で急増する小児肥満の対策として 2 社が協働で行う新しい教育・医療ビジネスを提案しようとするものであり、生活環境マネジメント学科の専門科目である「食生活環境論」[3)]の受講生だったゼミ生の発案であった。

このような途中でのテーマ変更によって準備期間はかなり短くなったが、参加学生は精力的に調査し、討議してビジネスプランを固めた。その新しいプランをもって 8 月 23 日に第一三共を訪問し、その後ベネッセにも 2 回訪問した。これらの訪問で得た情報や助言を基に 600 字にまとめ日経センターに提出した（9 月 13 日）。

その後、ゼミ生は発表用パワーポイントと原稿の作成に取り掛かり、発表日 2 日前に完成させた。発表は 3 名（4 年生 1 人と 3 年生 2 人）で行うこととなり、担当部分を原稿なして発表できるよう各自が練習に励み、当日に臨んだ。

9 月 28 日当日は、9 大学中本学が最初の発表者であった。筆者の目にも、発表前の 3 名が極度な緊張状態にあることが明らかであった。

４．発表とその結果

宮崎ゼミは「中国での食と健康についての教育」をテーマに 15 分で発表した。発表内容は紙面の制約上省略するが [4)]、筆者の目からは想像以上の素晴らしい発表であった。

発表後、両社からは次のようなコメントがあった。

【第一三共】今回の発表には、グローバルな社会貢献として、対象国をよく理解しているか、異業種間の企業のコラボがうまくいくか、社会課題を的確に捉え解決策を提案しているか、という 3 点で見た。まず一つ目は中国という新興国の富裕層の肥満問題を取り上げ、その文化と医療の制度を良く調べた。2 つ目は第一三共の医薬とベネッセの教育の二つの領域を良くまとめた。3 つ目は新興国の社会課題として貧困の次に来る課題をよく捉えた。事業の採算性の試算は、考え方としてのスキームはよく整理されている。今回の提案は企業にとっては大きなヒントになった。

【ベネッセ】最初違ったテーマで検討していてかなり悩んでいたようだが、このテーマに変えてからは追い込みがすごく、多くの情報を調べてまとめ上げた。経済発展している国の非感染症に目の付けたことが面白い。海外でビジネスを開始する場合には顧客との接点を作ることが難しいが、今回の発表では弊社の発行する「こどもチャレンジ」の顧客に定め、それをビジネスプランにつなげたのはよいと感じた。実際に中国でビジネスをするには種々の問題があるが、困難な点を更に詰めるとさらに面白い提案になると思う。

【参加したゼミ長（清水春花さん）のコメント】

私はチームリーダーとして参加しましたが、振り返ってみれば準備に充てた 4 ケ月という間は、様々なことを実感する期間となりました。例えば、「最後まで頑張る」なんて、一見すると当たり前のことですが、これを実行するのは想像よりも大変なことでした。予期していなかった事は次々と起きますし、自分の価値観だけではどうにも前に進めないこともありました。迫り来る締め切りに、もう逃げ出したいと思う事が何度もありました。

しかし、チームメイト一人一人の持ち味や閃き、宮崎先生がくださった多くの助言、そして協力してくださった第一三共とベネッセコーポレーションの CSR 部の方々からの刺激的な指導など、多くのものを受け取る中で、チームの中で次第にアイディアが具体化され、ゴールが見えて来たのです。そして最終段階である発表当日も、満足のいくプレゼンテーションができ、かけがえのない経験が出来たと感じています。こうして、周りの人に支えられながら最後まで頑張り抜けたことを、誇りに思いますし、また少し不思議にも感じます。

今回の経験は私にとって大きな糧となると思います。きっと、これから先に難問に直面しても、この経験を思いだせば、解決する力が沸いて来ると思うのです。その時のために、人と協力することや、感謝の気持ちがいかに大切かと感じたことを、胸に刻んでおこうと思います。

５．まとめ

ゼミ活動として企業と連携して学生が自主的にアイデアを検討し外部の発表会でプレゼンするということは、筆者にとっては初めての経験であった。内容的にはかなり難度が高いテーマであったため、筆者は内心不安ではあったが、学生の潜在力に期待し、自主的な判断に任せることにした。筆者がゼミの指導教員として心掛けたことは、参加を強制しないこと、ゼミ内で学生がリラックスして話し合えるように何回も小グループで討議し、その結果をゼミ長中心にゼミ全体の話し合いで取りまとめるように側面的に支援したことである。ゼミ生は、当初参加を決める時にはかなり慎重であったが、一旦参加が決まると一挙に積極的になり、リーダーであるゼミ長を中心に皆で話しあい、案を分担して作成し、企業のアポも自ら取って学生だけで訪問し、最後の発表資料を作成し、当日の発表に臨んだ。

企業側のコメントと発表者のコメントを見ると、本コンテストへの参加は、学生の能動的学修につながる PBL として十分な成果を挙げたと筆者は考えている。

最近は教育再生実行会議で大学改革が議論されており、今後様々な改革が打ち出されてくるであろう。その中では、学生の能動的学修を実現する PBL が一層強調されていくことは間違いないと考えられる。ゼミは PBL の典型（安西、2013）であるが、企業との連携を含め学生の問題発見・解決能力を高めるためにはどのような方法が効果的か、また講義では PBL をどのように取り入れていくのかが今後の課題となるであろう。筆者としては、本学の学生の潜在力を信じ、PBL への取り組みを一層深めたいと考えている。

注

1) 宮崎ゼミは「地球環境と私たちの生活」をテーマとするゼミであり、25 年度のゼミ生は 27 名（3 年生 11 名、4 年生 16 名）であった。
2) 日本経済研究センター「GSR 研究会」http://www.jcer.or.jp/gsr/index.html （2014 年 2 月 8 日確認）
3) 生活環境マネジメント学科の石渡尚子教授が担当する講義であり、肥満と飢餓をテーマとする回に近年問題となっている開発途上国の肥満の原因と改善策についての講義を受けたとのことである（宮崎ゼミ生の一人が受講）、
4) 当日の模様は USTREAM にて公開された : http://channel.nikkei.co.jp/business/130928_gsr/5995/

参考文献

1. 安西祐一郎（2013）「主体性を身につける－PBL の有効性と課題」日本私立大学連盟『大学時報』2013 年 3 月号、pp.30-37.
2. 中央教育審議会（2012）「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）」平成 24 年 8 月 28 日